

[研究ノート]

## 生涯学習として高塚人志の実践を進めていくための一考察

～青年期における「親になるための学び」の視点から～

One consideration on the practice of Hitoshi TAKATUKA as life-long learning

～It is a viewpoint of “learning to become a parent” in youth.～

名古屋市立大学院人間文化研究科博士前期課程修了者 間 宮 久美子

Kumiko MAMIYA

---

*Studies in Humanities and Cultures*

---

No. 7

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 7号

2007年6月

**GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES**

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2007

[研究ノート]

## 生涯学習として高塚人志の実践を進めていくための一考察

～青年期における「親になるための学び」の視点から～

名古屋市立大学院人間文化研究科博士前期課程修了者 間 宮 久美子

**要旨** 本研究の目的は、生涯学習として、「親になるための学び」を進めていくために、すでに10年以上にわたって効果的实践成果をあげている高塚人志の「ヒューマン・コミュニケーション授業（思いやりの気づき体験学習・ホスピタリティー）」をもとに考察するものである。

まず、今日の家庭教育・家庭科教育・家庭支援の現状と問題点から考察し、親になるための視点を論ずる。

「親になる」には、ただ子どもを生み育てるといったことだけでなく、一人の人間として自立し、自己肯定感・自己効用感を持ち、自分の発達を振り返ったり、家庭を持つことや、継続的子育ての予備知識体験、豊かな人間性と人間関係の体験が大切になってくる。この論文では、高塚の実践に学んだことをもとに、筆者が考えた青年期における「親になるための学び」の目的と視点について5節にわたって具体的に論ずるものである。さらに、青年期に「親になるための学び」を体験学習する意義と、全国で始まっている取り組みを紹介する。

**キーワード**：生涯学習、親になる、ヒューマン・コミュニケーション、ホスピタリティー

### 序章

この研究の目的は生涯学習として高塚人志の実践がなぜ今必要なのかを考察することにある。

まず先に高塚の実践と目的を簡単に紹介する。高塚は、現在鳥取大学医学部の学生に「ヒューマン・コミュニケーション（思いやりの気づき体験）授業」を実践している。またこの他にも、10年ほど前から全国の学校・医療・看護・地域・高齢者施設などでも「心を癒し心を開き心を結ぶ人間関係づくり」実践コミュニケーションを行っている。その目的は、人間関係を学び体験して、自分と向き合い、自分をみつめ、自分の生き方や人間関係を見直すことにある。なぜ高塚が人間関係に、そこまでこだわり、おもきを置いているのか。その根底には、「人は人によって育てられる」という考え方があるからである。

私たちは大人になるまでの間に、親や祖父母、親戚、先生、友人等大勢の人との関わりの中か

ら一人の人間として生きていくすべを学んでいる。しかし、今この生きていくすべを学ぶことができる家庭や地域社会の関わりが薄くなってきている。例えば、「おはようございます」「こんにちは」「ありがとう」「ごめんなさい」「おやすみなさい」「さようなら」など、人と人とを繋ぐ言葉の掛け合いや表情・しぐさから私たちは、相手の思いや感情を察知して返している。そのなにげない行動がうまくできるかできないかが、人間関係に大きく影響を及ぼしている。また、人間関係の原点は、胎児の時からすでに始まっているとさえ現代では言われている。<sup>1</sup> 赤ちゃんの泣き声でお母さんは、我が子が今どんな状態なのかがわかるようになってくる。赤ちゃんが心地よければ、にっこりと笑ってくれる。生まれて間もないこの親子の関わりが、人とうまく関わり合って生きていく原点になる。ところがこうした親子の絆からはじまる人間関係がうまく形成できていないことが、現代病とまで言われている不登校・ひきこもり・うつなどの状態に、少なからず影響しているのではないだろうか。

では、どのようにしたらうまく人と関われるようになるのだろうか。そのためには、相手の気持ちになって聴くこと、言葉だけでなく相手のしぐさや表情などを、組み取ることの体験が不可欠になってくる。「優しくしましょう」と何度言われても、本で読んでも、優しくされた体験がなければ人に優しくすることはできないものである。明橋大二是現代の親に対して、「子どものそのままの姿を認めてやり、子どもの頃は甘えさせてそれをしっかり受け止めてもらうことで自己評価が育まれる。塾に子どもが行っても行かなくても、勉強ができてもできなくても、子どもなりに一生懸命生きていることを認め、(あなたは私たちの大切な子どもなのよ)と親が子に伝えることができれば、子どもに手がかかっても子どもは自立を始めていく」と書いている。<sup>2</sup> 親子の信頼関係が深ければ、当然子どもの心は穏やかである。

しかし、現代社会に生きる私たちは「人として生きる」という過程の中で、人間関係やいのちを大切に作る体験が乏しくなっている。それは、子どもだけでなく、親にも言えることである。近頃の、なるべく人と関わりを持たないような、関わりを持たなくてもいいように考えられた社会環境もいかなものであろうか。高塚は、今こそ人と人がうまく関わっていくためにあえて「ヒューマン・コミュニケーション(思いやりの気づき体験)」の学習がどの年代にも必要であり、人が心と心をつなぐ人間関係を見直す時期にきていると指摘している。高塚の実践は、どの年代であっても学ぶ必要があるが、本稿では、生まれてから家族として生きてきた枠から離れて生活をしていく青年期にこそ、大切な自分を知り、さらに円滑な人間関係や自己肯定感(自己効用感)を持つこと、一人の人間として自立して生きていくこと等を学ぶことが重要であり、それが将来の結婚、子育ての準備として貴重な体験学習になるのではないかと考え、青年期に重点をおいて考察する。

以下、第1章では、ここ何年も問題として取り上げられている、家庭教育・家庭科教育・家庭生活支援の課題を明確にした。第2章では、高塚の実践についてまとめた。そして第3章では

「親になるための学び」の視点を論じ、第4章では「親になるための学び」を学習していくことの意義を論ずる。尚、本稿で「親になる」とはただ子どもを生み育てることだけでなく、一人の人間としての自立がまず必要であることを含意している。ここで言う青年期とは、結婚する前の成人前期も含めている。

## 1. 家庭の現状と問題点

### 1) 家庭教育

家庭教育とは、親またはこれに準ずる者が子に対して行う教育である。基本的な生活習慣や倫理観、自制心、自立心など「生きる力」の基礎的な資質や能力を育成するものであり、すべての教育の出発点である。<sup>3</sup> しかし現在、家庭や家族を取り巻く社会状況や家庭教育が問題になっている。ある調査によれば、少年の非行は、家庭環境の悪さによるものが多く、中でも親子のコミュニケーションの不足が指摘されている。また非行少年の保護者の多くは自己中心的で公共心・協調性に欠け、社会の結びつきに対する関心が希薄であるとしている。<sup>4</sup>

平成15年内閣府青少年育成施策大綱目的によれば、青少年期は、個人にとってかけがえのない人生の一部であり、平均的には人生の三分の一にも相当する期間である。人格の基礎が形成され、言わば人として根を張り、幹や枝を伸ばし、葉をつける時期である。また、大人となるための準備期間として、その過ごし方は単に青少年期の幸せに留まらず、人として花を咲かせ実をつけられるかどうかなど人生全体の幸せを左右するほどに重要な期間であり、年齢によって程度や内容は異なるものの、成長していく上で家族や社会の支援が欠かせない時期である。<sup>5</sup> 青少年自身の生き方そのものだけでなく、大人の社会の見直しを含め、地域社会との関わりも重要である。

また、一方では子どもの規範意識が低下しているとの声もあるが、それは単に子どもだけの問題だけではなく、親や社会の中で育てられたことによる結果であると考えなければならない。人は皆、親或いは親に代わる誰かに育てられて成長していく。その成長において親と子の関わりはとて大切になってくる。「親になる」には、単に子どもを生むことだけではなく、まず一人の人間として大切な自分を知り、いのちの大切さがわかり、自立し責任を持って自己実現していくことが求められる。しかし、この「一人の人間として生きる」ことが今かなり難しくなっている。そこで青年期に「親になるための学び」が必要ではないかと考えるのである。この学びは、青年期の自分自身の成長のための学びであると同時に、将来の結婚・子育てのためにもなるという二重の意味を持つ。

平成6年文部科学省の「家庭教育に関する比較調査」<sup>6</sup>によれば「子どもに満足しているか」との親の問いに対して、満足していると答えた人はスウェーデン85%、イギリス80%、アメリカ80%、タイ75%、韓国55%、日本40%という結果であった。日本の親は子どもの成長についての満足度が他の国に比べて低いことがわかる。これは日本の親が自分の子どもを他の子どもと比較

したり、自分の期待感を尺度にして子どもを評価したりすることが原因ではないかと見られている。またベネッセ教育研究所の「小学生の自己評価」調査によると、日本の小学生の自己評価は、民族的な違いはあったとしても、他の国より極めて低いという結果が出た。これは、親の子どもに対する満足度の低さや、子どもの個性が大切にされていない現状が反映されていると分析されている。<sup>7</sup> 既述のように明橋は、自己評価を育むために大切なのは子どもの自立心を育てることであり、その自立心は、安心感が充分にないと育たないと述べているが、<sup>8</sup> 両調査の結果からは、日本の家庭教育が子どもの自己評価を育む基盤となっていないことが明らかである。

このような状況で結婚・子育てをすれば、親にも子にもかなりのリスクが生じると考えられる。筆者が居住する愛知県春日井市では、生涯学習推進計画策定<sup>9</sup> に向けた3000人アンケート調査を行ったが、そこには、生涯学習として、「いのちの大切さや、守らなければいけないルールやマナーを学ぶこと」、「自立した家庭人を育てる学習の場が必要である」、「具体的な子育てや生活していくことを学び体験する場が欲しい」等多くの要望が寄せられた。現在でも国や地方自治体において、子育て支援や、青少年の問題行動への対処療法的施策が展開されているが、もう少し長いスパンでの家庭教育支援策が必要とされていることがうかがえよう。例えば、現代の家族では体験することが難しいコミュニケーションスキルの学習を、生涯を通じて学び体験出来る機会があつてよい。特に青年期には、自己肯定感や自己効用感、コミュニケーションスキルを学び、人間の発達や、いのちの尊さに触れる体験をし、「人として生きること」について考える時間を持つことに意味があるのではないだろうか。

## 2) 家庭科教育

文部科学省は、学校教育における家庭科、技術・家庭科教育のねらいを、①実践的・体験的学習活動を通じて、生活に必要な知識と技術を習得させ、生活をより良くしようとする能力と実践的な態度を育てる。②生活と技術との関わりについて理解させ、工夫し創作する能力を育てる。③家族の構成員としての自覚を持たせると共に、家族・家庭の意義について理解させ、男女が協力して家庭生活を築いていくことに意欲を持ち、その充実向上を図る能力と態度を育てる、としている。また近年の技術・家庭科の教育内容は、男女共同参画学習社会の推進や少子高齢化等の対応を考慮して家庭のあり方や家族の人間関係、子育ての意義などを充実させている。

このように、外形的には充実した家庭科教育が行われているかに見える。さらに、家庭科教育での学習経験が本人の自立にどのような影響を与えているかとの研究や<sup>10</sup>、大学生の家庭科学習内容の実践と自己肯定感及び他者への共感性との関連研究<sup>11</sup>などからも分かるように、家庭科の持つ役割は、成人になるための大切な教科として認識されていることは間違いないと思われる。

しかし、先行研究では、現在の技術・家庭科の時間数や設備、指導方法などに問題があり、実際には、予定の授業が行われていないのが現実であると指摘している。その理由として、家庭での基礎的な力を親から教えられていないために、生徒間に家庭科的能力の差がありすぎることに

よって起きる問題があることや、受験によって家庭科が他の教科よりも軽視されてしまっているのではないかとの懸念があげられている。<sup>12</sup>

本来、技術・家庭科の持つ役割は、基本生活をどのように自分らしく描いていけるかを学ぶことにある。しかしそれが充分に行われていないのだとすれば、学校で補うことが出来なかった内容を、生涯を通じて学ぶ必要があるのではないだろうか。

### 3) 家庭生活支援

『平成10年度厚生白書』では「少子化の原因とそれを上回る社会の状況」として性別役割分業型家庭生活から母親だけに責任を負わせた子育ての歪みが現れ始め、特に80年代以降の仕事と家事・育児の両立を志向する女性には極めて負担が重く、専業主婦にとっても、結婚の現実には「優雅」ではなかったと論じている。<sup>13</sup> 同時期、『母源病』<sup>14</sup> の出版によって、さらに「母性神話」的考え方が有力的であると考えられるようになった。また、「ひのうえま」の年に合計特殊出生率が1.58になったことによって、初めて厚生省（当時）が少子化を深刻な問題として取り上げたが、現在この数値は1.25まで下がってきている。<sup>15</sup> 1994年にはエンゼルプラン、さらには新エンゼルプランが施策されてきたが一向に少子化の歯止めにはなっていない。近年では「子育て支援」として、仕事と子育ての両立のために親が利用しやすい保育園にしていこうことや、保育園を育児相談の場所とした地域の親子遊びの指導などが、厚生労働省中心で進められている。また、「ファミリー・サポートセンター」事業も展開されているが、これは朝夕の保育時間の不足を埋めるに留まっている。村田晶子は、従来の子育て支援施策には成人の女性としての母親観が欠落しているときびしく批判し、母親と子どもの関係の質的な転換とそれを実現する正当なシステムや学習を保障する制度への転換を指摘している。<sup>16</sup>

こうした現実を見ると、果たして経済的な負担が減って、教育の問題や、住宅、将来への不安などが緩和されても、青年期の男女が結婚して子どもを育てたいという希望が持てるだろうか、疑問を感じる。では、一体この少子化に歯止めをかけるには、どのようにすれば良いのだろうか。そこで筆者は、現在の行政の施策に加えて、まず企業の就業時間の転換としての「ワークシェアリング」<sup>17</sup>、男性の子育てや家事に対する意識改革・両親育児休業の保障、そして青年期に「親になるための学び」学習体験を進めていくことが重要であると考えている。家庭生活支援を考えた時、個人の考え方や価値観が大きな意味を持つ。例えば、夫婦になればそこにはお互いに尊重しあう関係が大切であり、子どもを持てば夫婦が協力しなければならない。<sup>18</sup> その時、個人としての人間的成長が未熟では到底家庭生活は成り立っていかないのである。

様々なプランの家庭生活支援が利用したい側とうまく関わることによって、家庭こそ家族がほっとできる空間であり、子どもを育てることが、夫婦にとって苦痛にも不利益にもならず、親が生き生きと暮らせる社会をつくること、それは皆の願いであり役割ではないだろうか。

こうしてみると、生涯学習として家庭の中での夫婦、親子の関わりや社会との人間関係を学ぶこと、また家庭科教育の中では人が生きる上でいかに自分らしくその生活を描いていけるかを学び考えること、さらに家庭生活支援では、行政・企業・地域・託児・夫婦の関わりが大切になる。しかし現代の日本社会では、人と人とが関わりを持つときに必ず必要なコミュニケーションが親子や社会の中でうまくできないことによって、人間関係に少なからず問題を抱えている。こうした問題にいち早く取り組み、長年にわたって効果的实践成果を上げている高塚の「思いやりの気づき人間関係体験学習」実践について第2章で紹介する。

## 2. 高塚人志の実践を分析する

### 1) 高塚人志の実践

ここでまず高塚人志を紹介する。高塚は順天堂体育大学を卒業後、保健体育の教諭として、鳥取県立赤碕高校で全国でも珍しい、人との関わり方を学ぶ「コミュニケーション授業」を教育課程に位置付け、9年間「より良い人間関係づくりや人との関わりを体系的・継続的な営みとして、体験的かつ実感を持って学習させる」という狙いを掲げて実践してきた。具体的には「人間関係の基礎を学ぶ学習と応用編」の二つを実践し「コミュニケーション授業」を通じてクラスの仲間と触れ合うことによって他人と関わることへの抵抗を少しでも少なくし、人と触れ合うことの楽しさを体験させる。さらに保育園児や高齢者と1対1で長期的に関わり、授業として人との関わりを体験させる。その結果、生徒は「自己肯定感」や「役立ち感」を持ち、自分の生き立ちや、命そのものが、かけがえのないものであることに気づいていくのである。

この実践は、全国の小児科医をはじめ医療看護・教育現場など多方面から注目を浴び、その実践を生かして、高塚は現在、鳥取大学医学部総合医学教育センター准教授として医学部の学生に対して、「ヒューマン・コミュニケーション（思いやりの気づき体験）授業」を行っている。また元文部科学省中央教育審議会専門委員・「鳥取コミュニケーション研究会」会長として、全国の学校・医療・看護・地域・高齢者施設などで、「心を癒し心を開き心を結ぶ人間関係づくり支援—実践コミュニケーション」実践を行っている。

高塚は、子どもたちが人との良い人間関係の築き方を知らないのは、人間関係体験の未熟さや生活の基本的体験不足の表れだと考え、親が変われば子どもが変わると著書の中で述べている。<sup>19</sup> この他にも高塚の著書は、『21世紀を担う子どもたちのために』、『自分が好きになっていく』、『17歳がかわる』など多数ある。<sup>20</sup> また高塚自身の病気体験から「食」について関心を抱き、子どもから大人までを対象に「食といのちのメッセージ」を送り続けている。

高塚は「7つの柱」で活動している。そのうち代表的なものとして①鳥取大学医学部の学生に「ヒューマン・コミュニケーション授業」を担当し、「気づきの体験学習」と乳児との長期交流をセットにした、医師を目指す学生に対する人間性・人間関係教育の実践、②「鳥取コミュニケ

ーション研究会」における、コミュニケーションスキルを高める実践、③「すてきなママやパパになるために」と題した、妊産婦と乳幼児との1対1の交流で、コミュニケーションを学ぶ沐浴体験実践、④さらに2005年には「共感のプログラム」（ルーツ・オブ・エンパシー）として、メアリー・ゴードンを招いてシンポジウムを開き、地元の子育て中の母親小・中・高の子どもたちが赤ちゃんとの触れ合い体験実践を行った。上記の「四つの柱」の内、以下では、①「ヒューマン・コミュニケーション授業（気づきの体験学習）」と、②「鳥取コミュニケーション研究会」について述べることにする。

## 2) 「ヒューマン・コミュニケーション授業」

高塚の実践のプロセスは、コミュニケーション能力を高める「思いやりの気づきの体験学習」と、乳幼児との長期交流から成り立っている。この授業は、人間力としてのコミュニケーション力（受容力・共感的理解力・プレゼンテーション力）、実践力（行動力・リーダーシップ・経験力）、気力（バイタリティー・チャレンジ精神）や自己肯定感、仲間の再認識を育むことを目的とし、それによって将来臨床現場におけるコミュニケーションにも心がこもり、患者や同僚に温かい眼差しで関わり、他者に安心感や信頼感を与え、望ましい態度や行動ができる全人的医療の実現のための一助となることが期待されている。授業内容としては、10回の気づき体験学習（前期・後期各5回）を各学期の初めに行い、話すことや聞くことについて体験学習し、今までの自分の話し方や、聞き方についてまとめる。力を合わせることで、協力すること、相手の気持ちになることなども体験学習しながら自分をみつめていく。その後毎週一回、午前中の時間、園児と20回にわたって1対1の交流体験をする。その実践レポートは毎回提出となっている。高塚は授業の初めにその一部を紹介し、体験で皆が何を考え気づき行動したかを知り自分の行動に置き換えて考えさせている。以下に学生のレポートや行動を紹介する。

「来週で前期の園児との交流が終わってしまう。少し寂しい気持ちがある。毎回交流の終わりに、今度はいつ来るの？何回寝たら来るの？とか言われてなかなか離れづらいけど、次回はもっと難しいと思う。」と、交流の当初園児に対して素気ない態度をとっていた学生が、園児と離れられない交友関係（自分が園児に大切に思われている）になっていった。またある学生は、「しばらく医学科の仲間を見ていると、一生懸命関わっている学生とそうでない学生とがなんとなくわかる。園児に対して、正面から向き合う気持ちのある人は、時には自分や園児の心を傷つけてしまうことを理解している。ぐずる園児を説得していた仲間は当然自分も気持ちがよくない。しかし、それは園児のことを思っただけの行為であり熱意だと思う。自分も見習わなければいけないと思った。」と書いている。クラス全員が一つの保育園に体験しているからこそ、日頃授業だけでは見ることのない仲間のこうした姿を認め自分をみつめることができるのである。またある学生は、「私のパートナーは初めてつかまり立ちと掴み歩きを見せてくれました。赤ちゃんの成長を目の



あたりにして、感動しました。パートナーの笑顔は私を笑顔にしてくれます。表情は本当にコミュニケーションに、欠かせないと感じた。」と、赤ちゃんの成長を素直に喜び、コミュニケーションと笑顔で接することの大切さを感じている。

最終授業では、交流体験から気づいたことや、学んだことを振り返りまとめ、自分をみつめながら励ましの手紙を自分宛に書く。また「プレゼント・フォーユー」としてクラスの仲間にも簡単な手紙を書く。こうした1年間にわたる園児・保育園の先生と学生そして仲間との密な関わりから、人間性やコミュニケーションスキルが高まっていくのである。

現代社会は自然に人間関係を学ぶことができた時代とは違い、人間関係が気薄になってきているため、意図的に人間関係づくりの場や、コミュニケーション（ホスピタリティー）を体験する場が必須な時代であると高塚は考えている。体験学習の中では、ひたすら自分と向き合い、自分を見つめ、今の自分自身の人間関係を見直す体験をすることで、人との関わりが円滑にできるようになるという実践を重ねている。さらに、1年間にわたる乳幼児との1対1の交流によって園児たちは、専属のお兄ちゃんお姉ちゃんができたとうれしい満足感を抱き、学生は園児から喜ばれ大切にされることで、「役立ち感」を実感し、「自己肯定感」が芽生え安心感と充実感を味わっている。学生は、自分を好きになり「生きていてうれしい」という気持ちを実感することで大きな自信が生まれ、より意欲的な生活を営むようになり、仲間（同級生）にも暖かな眼差しを向けることができるようになる。このような連鎖がより人間関係を活発にするだけでなく、人と人との確かな絆で結びついていく体験となっている。また豊かな人間性を身につけるためには、適切な礼儀やマナーを身につけることも同時に学習体験として織り込まれている。

鳥取大学医学部長は、対人関係が苦手な医学生が多いことを懸念して、「医者は多様な人と対応しなければならない。他人を思いやる気持ちがないといけない。」と述べ、「ヒューマン・コミュニケーション授業」の成果を評価している。<sup>21</sup> この高塚の実践は「生きる力・いのちの大切さに気づく」を育む授業として全国の教育関係者や、医療関係者、施設からも注目を浴びている。<sup>22</sup>

### 3) 鳥取コミュニケーション研究会（人間大好き、気づき、ふれあい、学び塾）

この研究会は年間5回にわたって、人間関係づくりや、コミュニケーション力を高めることを目的に、学生や一般の方々も対象に生涯学習として行われている。中でも毎年11月に船上山自然の家で開かれる「すてきなあなたになるために」の講習会には、全国から学生や有職者が参加している。2006年には全国から97名もの、教員、小児科医、大学教授、医療看護、福祉・保育・教育関係、中・高・大学・専門の学生、保護者等の参加があった。また中学生や高校生の参加もあり年齢も16歳から60歳を超えている人もいた。この一泊二日の寝食を共にする研修会は、会場に入った途端、自分の背負っている肩書きを脱いで、まったく一人の人間として関わり合うことが

できるのが最大の特徴である。ここで、人間関係づくりとコミュニケーションについての、二日間にわたっての学びが行われる。

まず、コミュニケーション力を高める「気づきの体験学習」では、ひたすら自分と向き合い自分をみつめ、今の自分の人間関係を見直し、どのようにしたらお互いに心地よい人間関係をつくっていただけるのかを考えさせられる。2006年の講習会では、気づきの体験学習1・2として、「より深く仲間のことを知り合う」「聴くことの大切さ」について体験した。さらに気づきの体験学習3として、「効果的なコミュニケーションのあり方を身につけるきっかけとする」を体験、夜には交流会がもたれ、気づきの体験学習4として「自分を知る」で構成されていた。そして二日目の最後はグループの皆からの「プレゼント・フォーユー」を受け取った。この宿泊実践コミュニケーション体験では、自分自身が癒され、元気と勇気をもらおうと共に、学んだことを学校現場や家庭、地域、職場ですぐに役立てることができる。さらにこの研修会を通じて全国の同職・異職の方々とも出会い交流ができることも大きな成果である。

自分を肯定できない、人や自分が大切に思えない、人とどう関係をつくったらいいのかわからない、自分勝手な振る舞い、自傷行為、不登校、引きこもり、他者への攻撃としてのいじめ、非行、怠学、学級崩壊等、すべてが人間関係に関係している問題である。高塚は、人間関係が気薄になっている時代だからこそあえて、集団の中で他人とうまく関わることや、協働して役割を果たしていくことを体験学習することが、人生をも左右する大きな鍵を握るのではないかと考えている。以下に2005年の参加者の意見を紹介する。

ある高校生は、「勉強よりも部活よりも大切なことに気づきました。それは人が生きていく上で最も必要なコミュニケーションでした。それに結びつく過程はもっと大切だと想いました。」と述べている。また千葉からの参加者は、「特に印象に残っていることは、グループの演習です。お互いに自分をさらけ出すことで、より自分を知ることができ、相手のことをより深く理解していただける過程を実感できたことです。自分を見直し、新しい自分を発見していく2日間でした。」と。また広島の参加者は、「自分を大きく受け止めていただきうれしくて・・・ああ人っていいなあと感じました。このような取り組みが、家庭に学校に社会に今必要です。そのためにどうするのか？それが私の中で大きな課題となりました。」と。鳥取の参加者は、「聴くことの大切さに気づき、誰にもとりわけ若い人達にも私と同じ欲求があることを感じる事ができ、私の子ども、そして日頃関わっている非行を起こした少年たちに対する素朴な信頼感が蘇ってくるような気がしました。今回の研修で最も大切だと思ったことは相手の身になったコミュニケーションをするということだと思いました。」と述べている。

こうした研究会を通じて、学校で学ぶことができなかったコミュニケーション体験学習をする

ことは、人にとって当たり前のはずのホスピタリティーマインド（思いやりの心）への気づきを促し、自分の人間関係を見直してみる良い機会となる。人間性豊かな人材を育成していくための研修会としての意義はとても大きいと考える。

### 3. 青年期に「親になるための学び」を進めていくための視点

本章では、高塚実践に学び、筆者が考えた「親になるための学び」の目的と視点について論ずる。

#### 1) 自己肯定感・自己効用感

「自分が好きになる」。高塚の実践にこんなタイトルがある。人は皆長所も短所も持って生きている。しかし、ともすれば長所よりも短所が気になって、自分自身を否定的にしか受け入れられない人がいる。人が生まれて最初に触れるのは親であり、その最初の40分間の親子触れ合いが一生を左右するくらい大切な親子の絆時間だという研究結果がある。<sup>23</sup> 近年「反応性愛着障害」の子どもが増えているが、ヘネシー・澄子はその原因について、0～5歳までの間に母と子の愛着関係が安定していないと、子どもは親に対して安心感が持てず、満足を味わうこともなく信頼関係も築けないとし、そのことが青少年の「引きこもり」にも関係しているのではないかと述べている。その原因となっているであろう親子の関わりについて、第1章でも触れたように、日本の子どもたちは、他の国の子どもたちに比べて、自己評価が極めて低く、子どもの個性が大切にされていないと感じており、また親の子どもへの成長に満足しているかとの親に対する問いでは、他の国より日本の親は低い数値を示している。これは親が他の子どもと比較し、自分の期待感の尺度で子どもを評価しているためであると見られている。このような結果をどのように受け止めていくかについては、それぞれ考え方はあろう。ただ、近年のニートと呼ばれる青年や、無気力無感動の青年の多くが、自己肯定感（自分を認め、ありのままの自分で良いと考えること）を持ってないでいる。それは彼らの多くが、生産に携わることなく、消費のみに生きてきた結果ではないかと考えられる。家族の中で、毎日自分の役割があり、家族のために役に立っていると意識できている青年がどれだけいるだろうか。幼い頃の親子関係の結果、「自分が嫌い」、「私なんか生きていても仕方がない」と自分を否定的にしか考えられない青年、なんとなく生きている青年、さらに今が楽しければよいと考える青年が多くなっている。<sup>24</sup> 佐藤洋作はこのような若者について、個として若者を育てるのではなく、若者の関係やつながりが育ち、社会が作り直されていくプロセスでこそ主体としての若者たちもまた育つと述べている。<sup>25</sup>

こうした状況を踏まえ高塚の実践は、高校生・大学生・青年期の人たちに、人間として生き生きと本来の力が発揮できるような心と体づくりを進めている。人間関係が希薄になってきている現在、親子の中で築けなかった信頼関係や役立ち感、どこかで取り戻す必要があるのではないかと。人との関わりから自分と向き合い自分をみつめ、今の自分自身の人間関係を見直し、どのよ

うな人間関係を作っていったら良いのかを考える機会が必要である。衣川さえ子は親役割の評価が自己肯定的なものであるほど、自己の安定感が得られ、親にとって自尊感情が高いことは自己の安定に繋がると指摘している。<sup>26</sup> また岩崎久美子は、「学校教育の場で自分の状況を的確に判断し、自分自身の生き方を選び、自尊感情、自分を肯定的に捉える感覚を育んでいくことが必要である」と述べている。<sup>27</sup> 結婚・子育て期に青年自身が自己肯定感や自己効用感を持つことができれば、自分を好きになることができるのではないだろうか。

## 2) 自分の発達を振り返る

「赤ちゃんの時の写真と歩き出した頃・学校入学頃の写真を持ってきてください」。小学校高学年に家庭科の時間でこのような授業があるが、その後は授業の中で、自分の生い立ちに触れることはほとんどない。生い立ちを知ることは、それまで関わってきた多数の人達に触れることになる。また、青年期に自分の発達過程に触れることは、自分が子育てをする際の予備的な学習にもなるであろうし、妊娠・生命の誕生・成長過程において、誰かの世話になりながら育てられてきた自分であることを振り返る機会にもなる。

筆者の考える「親になるための学び」の中では、小・中・高で学習してきた家庭科を基に、自分の成長と合わせて、子どもの体・ことば・心の成長・育児等について学ぶ機会を設ける。それぞれの年齢の特徴や発達過程を体験学習することで、親や周囲の人々に感謝の心を持つようになるであろう。さらに子どもを育てる側になれば育児のプラスにもなり、今ここに生きている自分が両親の喜びとして生まれ、育てられてきたことについて深く考える機会となるであろう。生育歴をたどる時、ともすれば自分にとって不甲斐ない事実を知ることがあるかもしれない。しかし、自分を大切に思えることに意味を感じ合えることが必要ではないだろうか。生きる形は違っても、私たちは親から生まれたという事実は変わらない。発達過程について体験学習することは、今の自分と向き合い、「人として生きる」ことについて考える機会に繋がるであろう。

## 3) 人間関係を築く

私たちは、生まれて間もない時から、人と関わって生きてきている。人と関わる時にどんなマナーが必要でどうしたらうまく人と関われるのだろうか。

ホスピタリティーとは、思いやりの気持ちと、それを実践することを意味し、医療や福祉やホテル産業分野で重視されてきた用語である。近年、人間関係がうまくつけれない理由などで、「うつ」や「引きこもり」の症状を訴える青年も増えているが、本来なら家庭の中で親から学ばずのコミュニケーション能力や親切・気配り・思いやり・おもてなしの心などは、どれだけ身につけられているだろうか。こうしたことは、以前は親・先生・上司・隣人が口うるさく指導したものである。コミュニケーションは親との関係から始まる。ところが核家族化が進み、食事は個食化になり、家族団欒の時間が少なく、一日中話をしない家族もいる。このような原因で、コミュニケーションがうまくできない青年が、人間関係で悩んでいるケースはまれではない。

そこで、親になる前にコミュニケーション（ホスピタリティー）を学び、自分自身のことを見直し、相手を思いやる体験はとても大切ではないだろうか。ホスピタリティーを相手にどう伝えるかを考えればコミュニケーションがうまくなる。相手とうまく交わせるようになれば、周りの人たちとの人間関係も円滑になると考えられる。本田由紀は「コミュニケーションスキルは、青少年の各面での「自立」に対してプラスの働きをもっており、それを形成するためには、基本的な知的能力に加え学校、家庭、地域などにおいて豊かな人間関係を体験することが有益であり、コミュニケーションスキルが低いとネガティブ志向になりやすい」と述べている。<sup>28</sup> 青年期にあえてコミュニケーション（ホスピタリティー）を学ぶことは、今後の豊かな人間関係を築くために良い影響を与えるものと考えられる。

#### 4) 家庭を持つことについて考える

近年、家族や家庭という言葉があまり語られなくなり、その代わりとして「個人」概念が重要視されてきている。確かに個人の集まりが家庭や家族という捉え方もある。しかし、家庭を持つということは、お互いの立場を尊重し、協力し合わなければならない。個人の幸せだけでなく家族全体の幸せをお互いが考えていくことが大切になってくる。

1980年の時点では、男子の98%、女子の96%が50歳までに一度は結婚する「国民皆婚」社会であった。しかし近年は結婚を選択的行為としてみる者が増え、97年の「出生動向基本調査」では、結婚意志を持つものは男女共に90%を下回った。これは結婚意欲の減退を物語っている。<sup>29</sup> さらに既述のように2006年の「合計特殊出生率」は過去最低となった。少子高齢化の日本は益々その下降線をたどっている。この結果を青年たちはどう受け止めているのだろうか。

また、フリーター、ニート、失業者と呼ばれている青年は全国で400万人を超えているとの調査もある。<sup>30</sup> その影には、企業の雇用の問題や、就労の問題も大きく絡んでいることも指摘されている。本田はこのような青年の状態について、「正社員の長時間労働の抑制、非正社員から正社員への登用の促進、仕事内容に応じた均衡待遇の確実な実施など、正社員と非正社員との分断をゆるやかにし、いずれも生活の安定と辛すぎない働き方がかなえられるようにすると共に、個人の希望や職業能力に応じて、両者の間を柔軟に移行できるしきみを整えることが不可欠であり、政府・企業・労組が一体となった取り組みを急いで進めなければなりません。」<sup>31</sup> と述べている。また坂本由紀子は、「青年が将来に対して希望が持てるような社会の仕組みに変えていくことが急務であろう。その一方で青年に再度教育や訓練の場を創り、正社員として就職し家庭を持つのに十分な所得を得られるような道筋を創ることが重要である。」<sup>32</sup> と、青年に対して再度学ぶ場を設けることが必要であると述べている。

本田や坂本は青年の将来に対して安定した生活を創ることがまず大切だと考えている。勿論経済的安定がなければ結婚して家庭を持つことなどできない。しかし、そう考えるまでのプロセスがどこか違ってしまっているのが近年の青年ではないか。「自分の生活をどうしたらいいのだから

う」「何を努力すればいいのか」と、青年自身が自分の問題に自ら取り組もうという前向きな姿勢がまず欠けてしまっているのではないだろうか。

また、生きていくこと、生活することがまず基本にならなければならないにもかかわらず、余暇や娯楽が優先され、自分の収入より多い不適當な多額のお金を借り苦悩を抱える人もいる。さらに生産に携わることなく消費のみしている若者も多い。また、本来、家庭を持つことによって助け合わなくてはならないという夫婦の基本的なルールは、親の背中や家族の関わりを見て家庭の中で学習していくものである。しかし現実の家庭では、親子関係が薄く家庭の中での家事分担なども少ない。<sup>33</sup> 家庭の中で一人の人間としての役割のないままに育てられ、消費のみが優先した青年が家庭を持つことは、とても危険に思えてくるのである。

2006年国立社会保障・人口問題研究所による全国家庭動向調査によれば、日本の家庭は育児や家事の8割を妻が担う「妻集中型」であり、夫の家事や育児の参加が少ないことが明らかになった。<sup>34</sup> 早く帰宅ができる企業の就業制度を見直し、男も家事や育児をすることで、家族みんながほっと安らげる場所となるような、協力・助け合いが大切である。家庭を持つことについて学習体験することは、青年の将来にしっかりとした根をはる有意義な時間となるであろう。

## 5) 継続的体験

妊娠して子どもが生まれるまで、またその子どもが1歳になるまでの過程を、青年が見たり触れたりする機会は、近年ほとんど無くなった。最近では、学校教育の中で育児体験を実施する事例もあるが、子育ては一度や二度触れた体験だけでは到底図り知ることの出来ないほどの過程を経ている。小児科医の内海裕美は「現代の親は子どもとの関係のとり方が上手ではない。極端な場合は我が子を虐待する親となり、他方では過干渉な親となって子どもの自立を妨げている。現代社会のより早く、より強く、より効率よくといった競争原理の価値観で子育てをしているため、親からの承認を得られずに、自分自身への信頼感が育っていない悲惨な状態にある」と述べている。<sup>35</sup>

そこで、青年期に継続的な育児体験の場をあえて作る必要があるのではないか。例えば、妊娠後期の女性に参加してもらい、母体からいのちの誕生、生育までを追って共に学び、生身の赤ちゃんを抱いたり、あやしたり、おむつを替えたりミルクを飲ませたりしながら、その両親から育児についての体験談を聞き、赤ちゃんとの関わり方を1年間にわたって育児体験をしていく試みである。この実践は体験する青年の学びとなるだけでなく、その両親にとっても子育ての喜びと自信に繋がると考えられる。また継続的な繋がりにより、身近で成長の様子が観察でき、時には機嫌が悪い赤ちゃんの様子にも触れながら、その時その時の対応をつぶさに体験する機会は、自分が子どもを持つ時必ず役立つであろう。また、妊娠から誕生まで共に過ごす時、夫婦・親子の関係もおのずと体験できる。参加親子は、ありのままを受け入れゆったりと子どもと向かい合うことが、大きな自信に繋がるであろう。

以上、「親になるための学び」の目的と視点を5節にわたって論じてきた。自己肯定感・自己効用感を持ち、発達過程や生活していくことについて継続的に体験学習し、コミュニケーション（ホスピタリティー・思いやりの心）を学ぶことによって、人間性そのものや人間関係も豊かになっていく。第4章では今まで述べてきたことを総合的に考えながら、「親になるための学び」を学習していくことの意義をまとめる。

#### 4. 「親になるための学び」を学習する意義

##### 1) 青年期の生涯学習として

今まで見てきたように、現在の家庭環境や家庭科教育では、「親になる」ための基礎が十分に保障されていないと考えられる。そこで青年期に「親になるための学び」を体験学習することが、自分自身に自信を持ち人間関係をより良くするために重要である。高塚の実践に見られるような視点、そして第3章で述べてきた体験学習をすることは、「親になる」ということだけでなく、ひとりの人間として生きることについて深く考える機会にもなるであろう。

一つのいのちが誕生し青年として社会の役に立つまでには数え切れない人との関わりがある。家庭・地域・幼稚園（保育園）・小学校・中学校・高校・大学（専門学校）・社会と人との関わりを絶えず持ちながら私たちは生きている。しかし、その関わり方がうまくできないことが、様々な社会問題を引き起こしている。人と関わる時の、相手を思いやる気持ちや、しぐさや言葉使いは、親から受けてきた経験が大きいと思われる。「良い言葉を使いましょう」「思いやりの心で接しましょう」などと本を読んでも、子どもに体験がなければ実際にどのように人と接すればいいのか分からない。家庭の中で、親や兄弟から大切にされてきた自分という満足感が持てない子どもは、人と接する時に相手を思いやることなど到底できない。そのような子どもが、学校機関に入れば少なからず人間関係でつまずきが生ずる。現在、学校ではスクールカウンセラーや心の教育相談を配置しているが、子どもたちの心の解決にはなっていない。考えてみれば人間関係は、生きている間一生涯続いていくものである。

高塚の実践の結果を見て明らかなように、人間関係の体験学習は、その後の学生の価値観までも変えるほどの大きな効果がある。<sup>36</sup>「親の役にたちたい」「頑張ること・諦めないこと」学生の表情には優しい眼差しや笑顔、乳児となんとかコミュニケーションをしようとする姿、そこには、しっかり人と向き合うことが喜びとなっていることが理解できる。できることなら全国の学校で、また生涯学習としてあらゆる年代の人達に、こうした取り組みができることが望ましい。少なくとも青年期に生涯学習として取り組んでいくことは、学習者が近い将来経験するであろう出来事に対する力づけ（エンパワーメント）的な体験学習の場になると考えられる。「親になるための学び」は、自分を好きになり、豊かな人間関係づくりの基礎として、青年期に意図的に体験する

ことが必要であろう。

## 2) コミュニケーション体験学習の広がり

現在、鳥取大学医学部の学生は、コミュニケーション体験学習「思いやりの気づき体験学習」の授業を受け、松保保育園児と1年間にわたって1対1での毎週の関わりを継続している。この取り組みを始めてから2年が経過している。学生たちは表情が豊かになり、自分のコミュニケーションの未熟さに気づいたり、子どもに対して言葉以外の相手の表情をくみ取る事や、親に対しての感謝なども生まれている。また鳥取大学医学部の有職者の職員にもコミュニケーション体験学習が行われている。こうした成果を見て、今春（2007）から徳島大学医学部でも平成18年度大学改革推進事業として文部科学省から、「現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム」に採択され、医療（医師、看護師）を目指す医療系学生に人間性・人間関係教育としてコミュニケーション体験学習が行われる。また岐阜大学医学部でも関心を示されている。

第2章でも述べてきたように、鳥取コミュニケーション研究会では、学生や有職者である方々が全国（北は北海道・南は沖縄）から集まり、生涯学習の場としてコミュニケーションスキルを高め、ホスピタリティー（思いやりの気づき体験）を体験学習している。また2006年12月には、鳥取大学の社会貢献推進課と医学部教育支援室が主体となって、保育園、幼稚園、小・中・高・大学関係者、教育委員会、医療、介護、子育て支援、社会教育、その他の職場において、人間性・人間関係、コミュニケーション教育に関心のある方を対象に、短期集中ヒューマン・コミュニケーションセミナーが開かれ、自分をみつめ、普段の人間関係を見直す「気づきの体験学習」や乳幼児との交流体験などが行われた。

このようにして、教育現場、医療現場、家庭、職場、地域すべてのところから、高塚メソッドを体験学習した人たちが、それぞれの職場で取り組みを広め始めている。混沌とした社会の中で私たちが見失ってきた、お金や物に翻弄されない人間性・人間関係そのものの豊かさを大切にしていきたいと考えている人が全国で取り組みを始めている。青年期に「親になるための学び」を体験学習することは、成人としての未来に明るい兆しをもたらしてくれるものであろう。

## 注

- 1 へネシー澄子『子を愛せない母、母を拒否する子』学研、2005。
- 2 明橋大二『子育てハッピーアドバイス1・2』一万年堂出版、2006。
- 3 文部科学省『教育白書』、2000。
- 4 藤井登美子『問題行動をする子どもに対する保護者の意識 少年問題研究結果報告～21世紀を担う子どもたちのために～』愛知県少年育成推進調査研究委員、2002。
- 5 内閣府青少年育成 共生社会政策統括官「青少年育成施策大綱」、2003。
- 6 文部科学省『家庭教育に関する比較調査』家庭教育手帳、1994。
- 7 ベネッセ教育研究所『小学生の自己評価』家庭教育ノート、1995。
- 8 明橋大二『子育てハッピーアドバイス3』一万年堂出版、2006。



- 9 春日井市生涯学習懇話会「春日井市生涯学習推進計画策定に向けての3000人アンケート調査結果」2006.12。
- 10 吉井美奈子、吉井美也子、鈴木真由子「大学生の自立の現状と家庭科教育の課題（自尊・依存・孤独に着目して）」第48回日本家庭科教育学会大会発表、2005。
- 11 田中宏子「大学生の家庭科学習内容の実践と自己肯定感及び他者への共感性との関連」第47回日本家庭科教育学会大会発表、2004。
- 12 飯田範子、工藤悦子、小林美礼「小・中・高一貫教育の家庭科のカリキュラム開発研究（第3報）教師調査に見るカリキュラム開発と評価の特徴」第48回日本家庭科教育学会大会発表、2005。
- 13 厚生省「少子化の要因とそれを巡る社会状況」厚生白書、1998。
- 14 久徳重盛著『母源病』サンマーク出版、1979。
- 15 中日新聞「厚生労働省特殊出生率」、2006.6.2。
- 16 村田晶子『『子育て支援』政策の問題性—育児の女性にとっての意味』『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第50輯、2005。
- 17 デンマークの「子育て問題」の取り組みとして女性が働くことが当然とされ、労働者を早く帰宅させ、子どもの育成は親の責任との考えで家庭の質を上げていくことを目的としている施策。
- 18 河合隼雄「こころの子育て」（誕生から思春期までの48章）朝日新聞社、1999。
- 19 高塚人志『いのち輝け子どもたち一食といのちと心のぬくもり』今井書店、2006。
- 20 高塚人志『21世紀を担う子どもたちのために』富士書店、1997。  
高塚人志『自分が好きになっていく』アリス館、2003。  
高塚人志『17歳が変わる』小学館、2001。
- 21 日本海新聞「人間性豊かな医師育成」、2005.7.31。
- 22 日本海新聞「豊かな人間関係取り戻せ」、1997.12.30。
- 23 ヘネシー・澄子「親子の絆」についての桜花学園大学における講演内容より、2005.11。
- 24 間宮久美子「女子大生の意識調査に見る成人教育の必要性」アンケート調査より、桜花学園大学卒業論文、2003。
- 25 佐藤洋作・平塚真樹編著『ニート・フリーターと学力』明石書店、2005。
- 26 衣川さえ子「親準備教育の現代的課題」（両親の育児ストレスの分析を通じて）『東洋大学院紀要』、1999。
- 27 岩崎久美子、中野洋恵「女性生涯学習「新しい生き方を求めて」、2002。
- 28 本田由紀「社会的自立とライフスタイル」第2章より『青少年の社会的自立に関する意識調査報告書』、2006。
- 29 湯沢雍彦『データで読む家族問題』日本放送出版、2003。
- 30 労働経済白書『労働力調査』2005、p.15~34
- 31 本田由紀「若者と雇用」中日新聞サンデー版、2006.6.4。
- 32 坂本由紀子「私が正しい〜ニートの扶養控除廃止を巡って〜」中日新聞、2006.6.4。
- 33 湯沢康彦『データで読む家族問題』NHKブックスp.35（日本・アメリカ・韓国の子どもの家事分担比較中で日本の子どもは、家事をまったくしていないが12%、アメリカ・韓国は0.2%）、1994。
- 34 中日新聞朝刊、2006.6.10。
- 35 高塚人志『いのちにふれる授業』小学館、2004、p.143。
- 36 高塚人志『自分が好きになっていく』アリス館、2003。

（研究紀要編集部は、編集発行規程第5条に基づき、本原稿の査読を論文審査委員会に依頼し、本原稿を本誌に掲載可とする判定を受理する、2007年5月8日付）。